

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32525

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720319

研究課題名(和文) イスラーム政治思想における「正統カリフ」概念の発展とスンナ派の形成

研究課題名(英文) The formation of the concept of Rightly Guided Caliphs in the Islamic political thought and the Sunnite self-identification

研究代表者

橋爪 烈 (HASHIZUME, RETSU)

千葉科学大学・薬学部・講師

研究者番号：10613862

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、イスラーム政治思想における「正統カリフ」概念の形成・確立の過程、およびイスラームの多数派であるスンナ派の集団形成や自己認識に同概念がいかなる役割を果たしたか、の解明に努めた。その結果、ムハンマドの教友の序列化と有徳性の確認作業こそが4人の「正統カリフ」という概念形成の淵源であったこと、またその作業はアリーとその子孫にイスラーム共同体の支配権が存すると主張するシーア派への対抗上、必要とされたこと、そしてその作業の妥当性と「正統カリフ」概念を認める人々こそが「スンナ派」という集団を形成したこと、以上の結論を得た。

研究成果の概要(英文)：I elucidated the formative process of the concept of Rightly Guided Caliphs in the Islamic political thought and, its role in forming the Sunnite group and their own identification. It is concluded that the concept of Rightly Guided Caliphs derives from the tafdil, which is an act to order and to recognize the first four caliphs, Abu Bakr, `Umar, `Uthman, and `Ali as they were, and that the tafdil is required as the best concept to counter to the Shi'ite, who have been claiming `Ali and his descendants are the right for the caliphate, and that the people who approved the validity of the tafdil and the concept of Rightly Guided Caliphs is indeed Sunni Muslim.

研究分野：イスラーム政治思想

キーワード：正統カリフ イスラーム政治思想 アラビア語写本 神学的イマーム論 タフディール スンナ派

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 2011年初頭以降、中東・北アフリカ諸国において民衆による政権批判・抗議活動が相次ぎ、チュニジアやエジプトでは長期にわたって権威主義体制を維持してきた政権が打倒された。これらの運動は、「イスラーム」が前面に出ず、専らその「民主化」要求の側面が注目され、結果的に事態は「民主化」の方向で推移していた。しかし、参加者の殆どがムスリムであるこれらの運動は、例えばエジプトにおける政府批判運動において、民衆が自らを「被抑圧者」、ムバラク大統領を「抑圧者、不正者」と見なす標語を掲げて活動しているなど、実際にはイスラーム的な文脈に位置付けることが可能なものでもあった。この「抑圧、不正」といった概念は「公正、正義」の対概念であり、人々は貧富や身分の甚だしい格差の状況にあって、公正な扱いを求めて示威運動をしていたことが、エジプトの事例から読み取れた。

(2) この「公正」の概念は、イスラーム政治思想の文脈のみで語られるものではないにしても、同分野において、しばしば支配者の資質の第一条件に挙げられる、重要な概念である。そしてイスラーム政治思想は、中世西欧の場合と同様、支配者の資質を問う「君主論」の形式を取り、「カリフ論(イマーム論)」と表現されてきた。この様に、ムスリムは往時から支配者に公正な統治を求め、その理想形がカリフ論に結実していたといえるだろう。

(3) この支配者を論じるカリフ論は、ムスリムの知の体系の一角を占め、20世紀初頭まで行われ、また欧米諸国の研究者も注目してきた分野である。ただその視点は、個別のカリフ論者を取り上げ、その思想内容を検討することに置かれてきたため、如何なる経緯を経てカリフ論がマーワルディーに至り、その後、如何なる経緯で20世紀初頭まで継承され、議論されてきたかという、カリフ論の発展とその受容に関する研究はほとんど為されていない。わが国でも、このカリフ論を包括的に取り上げた研究は、中田考「イスラーム法学におけるカリフ論の展開」(『オリエン』33-2、1990年)以外になく、その研究も、著者の述べる通り、準備作業の域を出るものではない。故に、イスラーム法学におけるカリフ論の発展経緯についての詳細はいまだ不明なままであった。

(4) 本研究を行う橋爪はこれまで、アッバース朝カリフの政治権力喪失を導いたブワイフ朝と、その傀儡下でカリフ制の維持と権力回復を試みた、第26代カリフ=カーディル(1031年没)その息子カーイム(1075年没)の活動についての考察を行い、両カリフの試みは、結果的に権力ではなく、政治的な権威としての立場を獲得する結果となった

との結論に達していた。ただし、この結論は政治史の観点からの検討によって得られたものであり、思想面でのカリフ論の成果が、カーディル親子の行動にどのような影響を及ぼしたのか、またその逆に、カリフや軍事政権の君主たちの活動が思想面でのカリフ論にどのような影響を与えたのか、という相互の影響関係についての考察については未着手であった。

## 2. 研究の目的

(1) 研究の背景から導き出せる課題は以下の通り。すなわち、10世紀末から11世紀半ばにかけての、カリフによる政治権力回復の動きと9世紀初頭から始まっていたカリフ論の、相互の影響関係を解明することである。具体的には、上記課題を思想史の観点から考察することで、現実の政治状況の背後で推移・発展した政治思想の具体的な内容を把握し、そこから当時のムスリムが支配者に求めた理想像を抽出する。これにより、現在中東各地で発生している政権批判の示威運動と、それに参加する人々の要求と運動の原動力となっている政治に対する態度の思想的源泉を明らかにすることが可能となろう。

(2) 上記課題の解決に対しては、カリフ論と現実政治が密接に関わる特定の概念を取り上げ、その発展と当該概念の、現実の政治や社会での用いられ方を考察することが最も効果的であると考え、「正統カリフ」概念を取り上げることとした。「正統カリフ」とは、ムハンマドの死後にムスリム共同体の政治を司った4人のカリフ(アブー・バクル、ウマル、ウスマーン、アリー)を指す。この4人は当初から「正統カリフ」と評されたのではなく、8世紀末頃から「原スンナ派」知識人集団によって、理想の政治を実現した支配者として、徐々に提唱されるようになった概念である。ただし、人数や該当者について統一見解があったわけではなく、当時のアッバース朝カリフたちが同概念を政治理念として採用したわけでもなかった。

(3) しかし、10世紀末~11世紀半ばのカーディル、カーイムの両カリフ期に至って、「正統カリフ」概念が現実政治の分野で積極的に用いられるようになった。またこの時期までに4人のカリフを「正統カリフ」と見なすカリフ論が政治思想の分野で一般化する。この事態は政治権力の絶対化を目指したアッバース朝カリフの政策の破綻とカリフの政治的象徴化、権威化を明確に示すものである。本研究では、この政治状況に至るまでの、「正統カリフ」概念を巡る知識人たちの主張や思想の変遷を明確することを目標とする。この作業を通じて、ムスリムの多数派が、4代目カリフ、アリーのみを正統と主張するシーア派に対し、自集団の象徴としてカリフを

据え、自らをスンナ派と自己認識し、「スンナ派」が明確な形を有するようになる歴史的状況に、カリフ論の果たした役割が明らかになると考える。

### 3. 研究方法

(1) 研究目的達成のために、本研究では、まず 9-11 世紀に著された神学書を中心とする思想書の読解を行った。本研究における神学書とは、イスラームの信仰箇条を学問的に扱った書物であり、信徒の共同体における生活全般を規定する法学とは異なり、神と信徒の関係において必要となる行為を示したものである。9 世紀以降に著された神学書の多くには、その巻末近くにカリフ論を扱う章が設けられており、この読解・検討が第一の作業となった。この作業を通じて、神学書中のカリフ論に示される「正統カリフ」概念の形成・発展の過程を、時代を追って把握した。

(2) 次に、上記神学書の著者をはじめとするカリフ論論者、及び「正統カリフ」概念の形成に深く関与した知識人の、政治・社会的背景と各種の人的・学問的関係を把握し、それらがカリフ論の内容に与えた影響を考察した。分析の主な対象を、年代記、及び学派ごとに著されている人名事典とした。

(3) 上記作業に当たっては、主として写本史料に基づくという方針を採用した。このため、毎年海外の図書館への写本調査を実施した。まずはトルコ共和国イスタンブール市にあるスレイマニエ図書館での写本調査を毎年行った。併せて英国図書館、およびエジプト共和国カイロ市にあるアラブ連盟写本研究所以での写本調査を行った。これら写本調査と複写作業により入手したデータを持ち帰り、読解作業に当たった。また国内でも写本の画像史料を所蔵する機関に赴き、適宜必要個所の複写を行った。

### 4. 研究成果

(1) 本研究の最大の成果は、預言者ムハンマドの教友の有徳性確認と序列化の作業である「タフディール」が「正統カリフ」概念の確立に大きく関わっていたことを明らかにしたことにある。このタフディールは、いまだ明確な宗派形成に至る前の「原スンナ派知識人」、特に預言者ムハンマドの言行(スンナ)を伝える伝承(ハディース)を重視する伝承主義者たちの間で行われていた、歴史的なカリフ就任者の有徳性とその順序をどこまで認めるか、という議論のことである。当時のアッバース朝カリフ=マアムーン(在位 813-833 年)やシーア派による第 4 代正統カリフ=アリー称揚に対して、明確な歴史観の提示が必要とされた「原スンナ派知識人」たちがアブー・バクル、ウマル、ウスマーン、

そしてアリーの 4 人をこの順序で有徳であり、この順序でカリフに就任した、とすることで、自派の自己認識を獲得し始めることになり、それがその 4 人のカリフを特別視し「正統カリフ」なる表現で彼らと呼ぶことへとつながっていくのである。もちろん当初から「正統カリフ」という表現が用いられていたわけではなく、またその 4 人の有徳性やカリフ就任順についても、現在のスンナ派信徒が理解するような歴史認識だけでなく、多様な認識が戦わされていたが、その議論に一定の方向性を示したのがハンバル派法学派の祖にして伝承主義者のアフマド・イブン・ハンバル(780-855 年)であった。彼の認識では、タフディールにおいては、アリーを有徳者の 4 番目とする認識はあまり積極的に示されなかったが、アリーが 4 人目のカリフであったことを、伝承主義者たちが拠って立つハディースに基づき明確に提示した。このイブン・ハンバルの議論が基礎となり、以後、「スンナ派」の神学における支配者論「イマーム論」において、アリーが 4 人目のカリフであることが確定し、さらにイブン・ハンバルの考えをさらに推し進めたアシュアリー(936 年頃歿)によって、アリーは 4 人目の有徳者と認められることになる。以上の結論に至る内容を提示したのが、2016 年 8 月刊行予定の論文「「正統カリフ」概念の淵源としてのタフディール—スンナ派政治思想の発生—」である。

(2) 上記の成果を得るに先駆けて、イブン・ハンバル以降、アシュアリー、バーキッラーニー(1013 年歿)、ジュワイニー(1085 年歿)、ガザーリー(1111 年歿)、そして彼以後の神学者たちの議論において、「正統カリフ」概念がいかなる過程を経て形成・確立されたかを明らかにした成果が、東京大学中東地域研究センター主催の 2013 年度セミナー「中東の思想と社会を読み解く」での研究発表「スンナ派政治思想における「正統カリフ」概念」の意義であり、それを論文化した「「正統カリフ」概念の形成—スンナ派政治思想史の一面として—」と題する、近藤洋平編『中東の思想と社会を読み解く』所収論文である。ここでは先の論文よりも時代を広く取り、カリフ論(イマーム論)の継承と発展の過程を、各学者の主著における議論の内容を比較しつつ、検討する作業を行った。上述の通り、「正統カリフ」という用語の発生は、イブン・ハンバルではなく、その思想を強く受けたアシュアリーに始まり、以後アシュアリー派神学者たちによって、アブー・バクルからアリーまでの 4 人が「正しく導かれたカリフ(正統カリフ)」として、歴史的なカリフ就任順で有徳であり、カリフに就任したことを確認されていったこと、また重要なことは、学者の議論内のみでの概念に終始せず、アッバース朝カリフが同概念を採用し、同カリフ制維持のためのイデオロギーとしたこと、それによって、いわゆるスンナ派カリフが誕生

したことを明らかにした。また、この議論に際して、イスラーム政治思想においては、イマーム（カリフ）の在り方を議論する2つのジャンルが存在し、当初は神学的な議論「神学的イマーム論」が主であったが、「正統カリフ」概念が明確な形をとるにしたがって、くだんの4人の有徳性や順序を自明視し、むしろカリフ（イマーム）の備えるべき資質や選定方法を議論する「法学的イマーム論」が政治思想の主流を占めるようになることも示した。

(3) イマーム論者たちの人間関係についてはそれほど多くの成果を得ていないが、イスラーム初期史研究会での発表「アシュアリー著『宗教原理の解説』におけるイブン・ハンバルの影響」にて、イブン・ハンバルからアシュアリーへの思想的影響を論じ、イブン・ハンバルの直弟子たちではなく、神学的には若干路線の異なるアシュアリーに、イブン・ハンバルのイマーム論やタフディールの思想が受け渡され、さらにそれが発展させられたことを明らかにした。この作業から、思想の継承が、いわゆる「学派」内に留まらないことの一部が示されたが、イマーム論の継承や同世代・同時代での横の議論・影響関係については、今後も継続して調査する必要があると考える。

(4) 本研究の柱の一つとして、アラビア語写本の積極的利用を提示したが、その分野での成果としては、2013年10月にベルギーのリエージュ大学で開催された「アラビア語自筆本学会 International Conference Autograph/Holograph and Authorial Manuscripts in Arabic Script」において、イスラームの政治思想家としても取り上げられるイブン・ハルドゥーンの自伝に関する写本研究の成果を披歴し（題目：Textual criticism on the manuscripts of Ibn Khaldun's autobiography）政治史研究・思想史研究における写本利用の重要性とその方法論の一端を提示した。この発表の成果は2014年4月に論文化し、学会主催者に提出した。その後、2017年にオランダのライデンにあるE.J. Brill社より刊行される論集に掲載が決定した旨、編者より連絡があった（HASHIZUME Retsu, E.J. Brill, Textual criticism of Ibn Ḥaldūn's autobiographical manuscripts）。

(5) また写本研究の成果の一端を含んだ、報告者橋爪の従来の研究であるブワイフ朝の政権構造に関する研究が、成果公開促進費の助成を受けることが決定している。本研究期間中、足を運んだイスタンブール市スレイマニエ図書館での写本調査およびイスラーム政治思想研究の成果を盛り込み、これまでの軍事政権とカリフ権力の関係や支配者の正当性に関する研究がさらに充実した形で世に問うことができる。題名は『ブワイフ朝

の政権構造』で、2016年9月に慶應義塾大学出版会より刊行予定である。

(6) 本研究は「アラブの春」と呼ばれる、中東・北アフリカ一帯の国々の政変や政治体制の転換を受けて、現代の支配者像理解にもつながる形でのテーマとして「カリフ（イマーム）」を取り上げたが、事態は急展開を遂げ、2014年6月には実際に「カリフ」を称する指導者が率いる勢力がイラク・シリア一帯で活動領域を拡大し、その暴力性を剥き出しにして中東のみならず世界的なテロ活動にも着手している。こうした状況を受け、我が国の国民の関心もおおのずと「カリフ」に向くこととなり、報告者にもカリフに関する講演の依頼があった。それを受けて行ったものが、東北学院大学文学部歴史学科第18回公開講座『生み出される歴史と伝統』での講演「正統カリフ概念の“創出”とその現代的意味：イスラーム政治思想の一側面」であり、また千葉県高等学校教育研究会歴史部会主催の2015年度秋季研究協議会での講演「カリフ：対シリアの象徴からイスラーム的統治の象徴へ」である。いずれも本研究で遂行してきた「正統カリフ」概念形成の過程とそこで戦わされた議論を主に提示するものではあったが、現代に再登場したカリフを理解するためにも必要な知識であることを改めて強調し、古典政治思想研究やイスラーム政治史研究が現代世界の理解に貢献することを示した。

(7) またこのイスラーム政治思想研究史上の一大転換点となる事態を受けて、新たに申請した科学研究費助成事業若手研究A（課題番号15H05382）では、現代に再登場したカリフの存在とその影響力や過激派組織がカリフ制を再興するに際して依拠した思想上の基礎を理解すべく、本研究が対象とした古典期の後の時期、すなわち13世紀以降20世紀に至るまでのイスラーム神学におけるイマーム論の継承について、写本の作成や転移の問題から迫ることを試みている。この研究を遂行する上でも、本研究で積み重ねた古典期のイマーム論研究や「正統カリフ」概念形成に関する研究成果が土台となっている。今後も古典期から現代にいたるまで長期的な視野でカリフを捉え、研究していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

橋爪烈、「正統カリフ」概念の淵源としてのタフディール・スンナ派政治思想の発生一、『歴史と地理 世界史の研究』、査読無、2016年8月（予定）、掲載決定済

橋爪烈、中村妙子、柳谷あゆみ、佐藤健太郎、五十嵐大介、「原典研究 イブン・ハルドゥーン著『イブン・ハルドゥーン自伝8』」、『イスラーム地域研究ジャーナル(8)』、査読無、2016年3月、64-91頁  
[http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/48303/1/IsuramuChiikiKenkyuJanaru\\_8\\_Nakamura.pdf](http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/48303/1/IsuramuChiikiKenkyuJanaru_8_Nakamura.pdf)

橋爪烈、「学界動向 スレイマニエ図書館—その概要と利用について—」、『イスラーム世界(83)』、査読無、2015年5月、59-83頁

橋爪烈、「書評 イブン・イスハーク著・イブン・ヒシャーム編註(後藤明・医王秀行・高田康一・高野太輔訳)『預言者ムハンマド伝』(全4巻)」、『イスラーム地域研究ジャーナル(7)』、査読無、2015年3月、92-96頁  
[http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/47131/1/IsuramuChiikiKenkyuJanaru\\_7\\_Hashizume.pdf](http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/47131/1/IsuramuChiikiKenkyuJanaru_7_Hashizume.pdf)

橋爪烈、中町信孝、原山隆広、吉村武典、佐藤健太郎、「原典研究 イブン・ハルドゥーン著『イブン・ハルドゥーン自伝6』」、『イスラーム地域研究ジャーナル(6)』、査読無、2014年3月、31-49頁  
[http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/41457/1/IsuramuChiikiKenkyu\\_6\\_Nakamachi\\_and4.pdf](http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/41457/1/IsuramuChiikiKenkyu_6_Nakamachi_and4.pdf)

橋爪烈、「『正統カリフ』概念の形成—スンナ派政治思想史の一断面として—」、近藤洋平編『中東の思想と社会を読み解く』、査読無、2014年8月、45-73頁

橋爪烈、「研究フォーラム プワイフ朝研究の課題」『歴史と地理 世界史の研究』、査読無、2012年8月、48-51頁

〔学会発表〕(計3件)

HASHIZUME Retsu, Textual criticism on the manuscripts of Ibn Khaldūn's autobiography, International Conference Autograph / Holograph and Authorial Manuscripts in Arabic Script, 2013/10/11, Université de Liège (Belgium)

橋爪烈、「スンナ派政治思想における『正統カリフ概念』の意義」、2013年度 中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」第4回、2013年6月29日、東京大学駒場キャンパス(東京都目黒区)

橋爪烈、「アシュアリー著『宗教原理の解説』におけるイブン・ハンバルの影響」、第8回イスラーム初期史研究会、2013年3月16日、早稲田大学120-1号館(東京都新宿区)

〔図書〕(計2件)

橋爪烈、慶應義塾大学出版会、プワイフ朝の政権構造、2016年(刊行決定)、480頁

フレッド・ドナー著、後藤明監訳、亀谷学、橋爪烈、松本隆志、横内吾郎訳、慶應義塾大学出版会、イスラームの誕生—信仰者からムスリムへ、2014年、304頁

〔その他〕

アウトリーチ活動(計2件)

橋爪烈、「カリフ：対シア象徴からイスラーム的統治の象徴へ」、千葉県高等学校教育研究会歴史部会 2015年度秋季研究協議会講演、2015年10月7日、千葉県立東部図書館(千葉県旭市)

橋爪烈、「正統カリフ概念の“創出”とその現代的意味：イスラーム政治思想の一側面」、東北学院大学文学部歴史学科第18回公開講座『生み出される歴史と伝統』第4回、2015年6月20日、東北学院大学(宮城県仙台市)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

橋爪烈 (HASHIZUME, Retsu)

千葉科学大学薬学部 講師

研究者番号：10613862